

西洋古代哲学というと、古めかしい書物と難解な文章を延々と読み解くイメージがあるかもしれません。しかし近年、生成 AI をはじめとするデジタル技術が研究の新たな可能性を切り拓きつつあります。たとえば最近の私の研究は Humanitext Antiqua (<https://humanitext.ai/>) という AI 対話システムを開発し、古代ギリシアの文献をより効率的に分析する試みを行っています。

このシステムでは、古典ギリシア語やラテン語で書かれた原典をデジタル化し、AI が文脈を理解しながら関連する箇所を提案してくれます。従来は一つひとつのテキストを丹念に読み解き、必要な情報を探すのに膨大な時間を費やしてきましたが、AI の助けを借りることで研究のスピードや正確さが大きく向上し、他分野との比較検討もしやすくなったと感じています。

また、こうしたデジタル手法を取り入れることにより、古代哲学と隣接する歴史や文学分野との連携も期待されています。膨大な文献群を対象に、言語や思想の変遷を横断的に解析することで、これまで見落とされがちだった文脈や相互影響を明らかにすることができるのです。私自身の研究でも、AI を使って新たな視点を得られるよう、試行錯誤を重ねています。

もちろん、デジタル技術がすべてを解決するわけではありません。古代テキストの背景には、哲学的・歴史的に多くの議論があり、アナログな手法で培われた文献学の知識や解釈力が依然として重要な要素です。だからこそ、伝統的な研究手法と最新技術との融合によって、新しい学問の地平を開く可能性が広がっているのだと実感します。

高校生の皆さんも、ぜひ「古いだけではない」西洋古典の面白さや、AI を活用した革新的な研究手法に触れ、学問の世界の奥深さを感じ取っていただければ嬉しく思います。

岩田直也 准教授

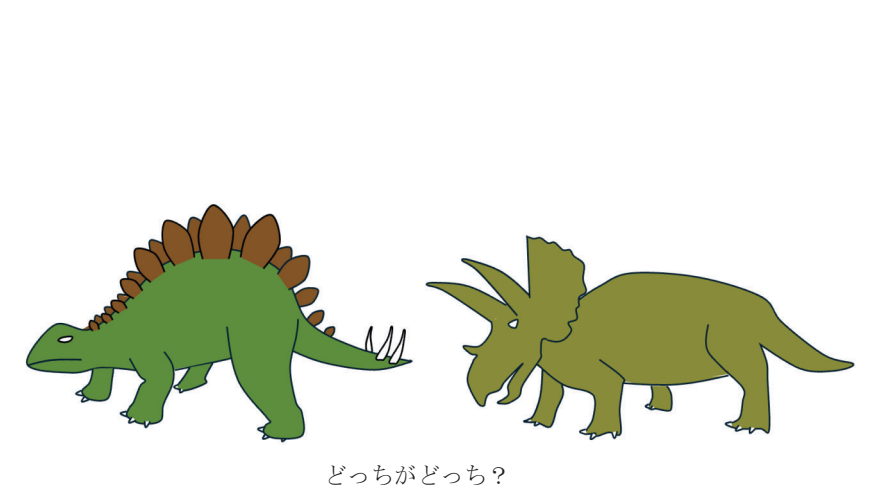


トリケラトプスとステゴサウルス、どっちがどっかわからなくなるのは私だけでしょうか？ よくよく考えると、「トリ」は triangle や triathlon の tri-なので、3 本 (three) の角を持つのがトリケラトプスです。ステゴサウルスの「ステゴ」は stage と関連し、〈屋根、覆い〉の意。確かに背中を覆うギザギザが特徴的です。

でも、なぜ両者はこんがらがるのでしょう？ いずれも四足歩行でずんぐりした恐竜だ、というのが 1 つの理由でしょう。さらに、2 つの名前は意外と似ています。いずれも 7 文字 (7 拍) であることに加え、使われている子音が似ています。子音には、p, t, k, s, b, d, g, z のように硬い響きのものと、m, n, r, y, w のように柔らかい響きのものがあります。発音の際、口の中で気流がたくさん邪魔される音は硬く、気流が比較的緩やかな音は柔らかく聞こえます。「トリケラトプス」の硬い子音は t, k, t, p, s の 5 つ、「ステゴサウルス」も s, t, g, s, s の 5 つです。名前の硬さが似ていること、そして、どちらの恐竜も実際硬そうに見えることが、2 つの名前をややこしくしているのです。

同じようなトラップは、子音の硬さ以外にも見られます。中学生の頃、pull と push がごっちゃになりませんでしたか？ push は「押す」って感じがしますが、pull も割と「押す」っぽい。いずれも p から始まる 1 音節の動詞であるせいで、力を込めて一気に押す動きに合ってしまうのです。〈引く〉と〈押す〉は正反対の行為ですが、正反対ということは、方向以外は似た行為ということでもあります。似た物事に似た名前が付いていると不便なのです。反対に、carrot と radish、hot と warm、eat と drink、似た物事に全然違う名前を付けるのは、当たり前なのに思えますが、実は理に適った言語の方針なのです。

秋田喜美 准教授



よく知らない町を歩いていると、「この人はどこで仕事をして、どこで暮らしているのだろうか？」と思うことがあります。私の住む名古屋市は、名古屋大都市圏の中心都市で、数十キロ離れた町からも通勤者がいるそうです。しかし、地元のスーパーで働くパートさんが、そんな遠距離通勤をしているわけではありません。そうすると、たとえ同じ地域に暮らしていても、見えている世界がまるで違うのではないかと思えます。一方で、遠距離通勤をしていてもスーパーは利用するし、パートさんだっけかつては正社員として都心で働いていたのかもしれませんが。私が地理学に関心を抱いたのは、こうしたひとの暮らしへの興味がきっかけでした。

地理学教室では、毎年夏に 4 泊 5 日で「地理学実習」が開かれます。昨年度は旭川、今年度は大分がフィールドで、参加する学部 2, 3 年生は個人でテーマを設定して調査を行います。私は家族経営レベルの小規模な店舗が現在でも主流だという点に着目して、生花店の経営をテーマにしました。電話帳を参照して店舗のデータを整理したり、聞き取り調査で経営のやりかたを伺ったりしていると、ひとの暮らしがほんの少しだけ見えてくるような気がします。

もちろん、産業だけが地理学の範疇ではありません。文化や交通、自然、人々の空間認知といったテーマも実習で扱われていました。異なる領域について学んでいると、なぜ自分がこの領域に関心があるのかということを変えて考えさせられます。影響を受けたり、あるいは疑問を抱いたりしながら、次は何をしようか、考え中です。

杉原虎哲 学部 3 年



月刊名大文学部

第 145 号

隔月刊行



編集発行：
名古屋大学文学部広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のものです。
2025 年 5 月 10 日発行